

2017年11月13日

言語・行動・社会

小山照夫 国立情報学研究所

1. はじめに

これまでに、言語は受け手の行動を促すためのものであることを論じてきた。しかし人間はどのような動機によってどのように行動を選択するものなのか、あるいは言語記述と行動とはどのように関係するのかについては十分に考察してきたとは言えない。

以下ではこれらの問題についていくつかの観点から考察する。

2. 言語と行動

まず第一に、言語記述と行動との関係について考察する。我々は言語記述が世界の状況の一部を指示し、それを伝えることによって受け手にある種の行動を起こさせるように機能することを当然と考えているが、このことは決して自明なことがらではない。

2.1. 言語の特性

そもそも言語記号や言語記述は、感覚的な特性からは、行動とは少しも似ていない。また、世界のどのような事物とも類似性を持たない。たとえば「犬」という記号は書かれたものであれ、発声されたものであれ世界に存在するどのような動物とも類似性を持たない。

またもう一つの問題として言語記号は一般には抽象的な類(クラス)を指示するが、これだけでは直接には具体的個物(インスタンス)を指示できないことがあげられる。言い換えれば言語は具体的な個物に関して記述するものではなく、抽象化された類について記述するものである。言語記述は所詮言語記号の並びであるし言語記号はいかなる具体的実在とも直接の関わりを持たないから、言語記述はそれだけでは具体的事物と全く関係を持つことができないことになる。

しかしまさに行動しようとしている動物にとって、第一義的に重要なのは個別の行動とその行動に関連する目の前の個別の具体的事物である。動物は類に対してはいかなる具体的行動をおこすこともできない。このような制約の下でなぜ言語記述が具体的な世界の状況を指示できたり、行動を引き起こすことができるのか問題となる。

この問題については一般に解釈というキーワードが使用されるのだが、それでは解釈とは何かはそれほど明らかであるとは言えない。せいぜい人間は、なぜか一つの言語記述を、部分的にせよ、具体的な事態や行動に対応付けることができると言える程度である。

解釈という名目の下で行われるプロセスは言語操作プロセスではないと推定されるから、そのすべてを言語で完全に記述することはおそらく不可能だが、そのいくつかの側面については考察することができるのではないだろうか。以下ではこの問題に関していくつかの考察を述べる。

2.2. 動物と抽象構造

まず、人間の言語を少し離れて、言語を持たない動物にとって、個物を離れた類というものが果たして何らかの働きを持ちうるのか、あるいはそもそも動物にとって類がその行動と関係を持つことができるのかを考察してみよう。

ここでは哺乳類程度に複雑な身体構造を持つ動物を考える。動物は世界の様々な在り方を経験する事を通じ、多様な状況の下で欲望を達成するために行動を調整することができる。言い換えるなら動物は学習能力を持っている。

ところで、学習機能は世界に存在する類似した個物を、その類似性によって特定の類のもとに帰属させるという抽象化なしには成立しない。すべて完全に異なっている個別の事例をいくら集めても、そこからは何事も学習できないであろう。複数の事例が何らかの要因で同一であるとみなすところから学習が可能となるのであり、個別事例のレベルでは同一性はないから、抽象化された類レベルで同一とみなされていると考えなければならない。学習が可能であることから、動物は完全に個別の存在が配置された世界だけではなく、抽象化され、法則化が可能な類のレベルでも世界を認識していることが推定できる。言い換えればある程度複雑な身体と行動様式を持つ動物は、内部情報構造として類に相当する抽象化された構造を持っていると推測される。

学習できる動物では、この内部構造に基づいて推定された法則に基づいて、行動の結果を予測し、それに基づいて行動計画が立案され、実行されていると推定できる。ところで、法則の適用までは類のレベルでの操作であって、推論操作結果も類レベルであると考えられるのだが、その結果を実際の行動に結びつけることができるということは、動物は類のレベルでの推論結果を、具体的な個物に対応付けることもできることを示唆する。

この対応付けを可能としている仕組みについて、言語で記述できる形で解明することは非常に困難であると予想されるが、あえて推定するなら、おそらくは感覚／運動記憶を介して行われているのであろう。ここで重要なことは、動物は本来その身体内に、類としての世界の抽象構造を構築することができ、さらにこの構造を実際の具体的事物に対応付けることができるということである。このことは人間についても当てはまると考えることができるであろう。

人間をはじめとするある程度以上に複雑な身体構造を持つ動物が、身体内に世界に存在する個物とも

対応可能な類構造を持っているとするなら、あくまで推定にはなるが、類レベルにある言語記述を一旦内部の類構造に対応付けることにより、これを介して個物にも対応づけることができるのではないかという仮説を立てられるであろう。

この仮説に従えば、新しく言語を習得しようとする個体は、同種個体の言語記号の使い方を観察することを通じて、言語記号を対応付けることができると推定される、内部構造としての類を発見できると考えられるであろう。この言語記号と内部類の対応が成立するなら、内部類と世界の個物の対応を通じて、言語記述を現実の状況や行動に対応づけることができるのではないだろうか。このような形での言語記述と現実状況との対応付けを解釈と呼んでいると考えることができる。

ここで一つ注意しておくべきことは、内部類と個物との対応は一義に決まっているわけではなく、当面問題とする欲望や、その達成のための行動、行動に関わりを持つ周囲の状況などに応じて変化すると推測できることである。敵に打撃を与えたいという状況の下では、たとえば大型動物の大腿骨と木の枝が置き換え可能な類似した存在であると認識されるかもしれないが、火をおこしたいという別の状況下ではそのような類似性は成立しないであろう。このような内部類のありかたは、言語記号の指示対象の状況依存性にもつながると推定される。

2.3. 内部類の構造

内部類構造に関連していくつか検討すべき側面がある。この構造はまず、平坦なものではなくむしろ階層化されていると考えられるであろう。これは言語記述と現実世界を対応付ける方法から推定できることである。このことはまた、言語と内部構造との対応付けは、現実に行動を起こす、さしせまった状況でなければ、必ずしも個物レベルに直結する詳細さで行われなければならないわけではなく、もっと漠然とした上位のレベルで、その下位階層のいずれかに属する、不定の個物との対応という形でも行われ得ることを示している。

類の階層化は、行動の可能性を広げるという観点からは大変に強力な枠組みである。特定の材料から道具が作れると分かっている場合、上位の類を共通に持つ別の材料を利用することの可能性が検討できるなら、もともとの材料が利用できない環境でも必要な道具を作ることができるかもしれない。

一方で言語を持たない動物の場合、階層を上位までたどるという能力は、それなりに備わっているとしても、人間に比較するとかなり乏しいのではないかと疑われる。感覚記憶と密接に関連すると思われる内部類構造だけでは、上位階層になるほど類の特性は漠然としたものになりすぎていて、具体的な個物を目の前にしない限り類として扱うことに困難があるのではないかと疑われるからである。これに対して感覚レベルとは独立した言語記述を持つ人間では、とりあえず言語記述として、具体的な対象を特定しないまま扱うことができると考えられる。ここでは言語記号と具体的な対象との類似性の欠如が、かえって操作性を高めているとも言えるであろう。

2.4. 類の階層化と分業

類の階層化を扱う動物の能力の限界を考えると、漠然とした構造をとりあえずそのまま操作する人間の能力はどのようにして発展してきたのかが興味深い問題となる。この問題に関して、人間に固有の行動様式である分業という観点から考察してみたい。

人間にしか見られない行動様式としての分業では、個々の個体が同一目的のためにそれぞれ異なる行動を行う結果、共通の目的が達成されることに特徴がある。ここで各メンバーの行う行動は、通常は時間的に一定の範囲内で同期がとれていることが必要である。しかしこの同期は常に厳密に実行できるわけではなく、多少の時間的ずれが生じることはある程度避けられない。時間的に少しのずれも許さない分業はその効果に大きな制約が生じるであろう。ここで最初は比較的短い時間間隔で良いから、他の作業が完了するまで待つことができるなら作業にある程度時間的ばらつきが生じて、全体として分業が有効となるであろう。

この時、待たせる作業者は、ある時間待てば分担する作業が完了する事を表明することが重要となるが、これはいわゆる「約束」と呼ばれるものとなるであろう。約束は当然のことながら「言語記述」に依存して行われることとなる。

一方、約束が表明された場合には、その実現を待つ立場の作業者としては、約束が実現した時点での全体的状況とそれに応じて行われるべき行動を予測し、準備する必要が生じてくるであろう。作業完了の約束と完了時点での行動の準備という形で作業進捗の同期が可能になるなら、分業は一層有効に進められると期待できる。

約束が分業を進める上で有効なものと認識されるならば、当初はごく短い時間間隔を置いての約束だけが行われたとしても、やがて実現までの時間のある程度伸ばしても有効な場合もあることが認識されるであろう。このことは、一定時間の後の状態、さらには場合によっては現在の場所とは異なる場所での状況について推測することが要求される事を意味する。この場合行動に関係する具体的な個物が約束の表明された時点・場所に既に存在していることは必ずしも保証されないことになる。ここでは個物の現存にとらわれない、より具体性の低い一般的な類のレベルでの予測が必要となることを意味する。

約束がある時間間隔をおいた将来予測を前提とするものなら、作業の実行者を特定しない形の約束も考えられる。分業において特定の作業の分担者を誰にするかという問題は常に生じる可能性があるが、可能性を特定の一人に限定せず、とりあえず誰かによって作業が実行されると仮定して計画を進めることが有効な場合も考えられる。この場合はまだ候補者を想定しているが、少し時間間隔が離れた作業を考えると、その時まで誰か候補が考えられるだろうという程度で、計画を進めることも考えられる。当面のところ誰もいない作業で構わないということは、偶然に外部の要因で状況が変わるとか、人間以外の要因で状況が変化することまで含めて考えることができるようになることを意味する。このことは、目的達成のためのより幅広い状況を想定する事を可能にするであろう。実行者が特定されなくても、ある時点までに問題が解決されている可能性の認識は、物語構成の可能性を拓くものでもある。

これまで考察してきたような予測を可能とするためには、やはり言語が重要な役割を果たすことになる。こ

こでも言語記述の、具体的事物とは類似性を持たない特徴が逆に有効に働き、一旦言語化された後は具体的状況を離れて言語の体系の中での抽象的操作が可能となる特徴が有効に働くと考えられるであろう。このことが想定可能な行動の範囲を大幅に広げることにつながり、分業の中でより効果的な行動を選択する余地を与えられよう。

分業、言語、抽象構造の操作はそれぞれが影響を及ぼし合いながら、より効果的な行動形式を生み出してきたと考えることができる。

3. 行動の意義と社会

これまでに言語と行動との関係について考察してきたが、そもそも動物にとって行動とは何かという問題を考察する必要がある。動物一般の行動について言えば、動物は欲望を持ち、行動によって欲望を達成しようとする存在である。欲望は基本的に「利己遺伝子」と呼ばれる法則にしたがい、進化の過程を経てそれぞれの動物種のあり方に適合する形で、すべての動物に本来的に備わっていると考えられるものであり、その原則は個体の生存・成熟と個体に固有な遺伝子の保存を最終目的としている。また、このために動物が起こす行動は、その置かれた環境と同種個体間関係(社会関係)によって制約されている。

以下ではまず欲望のいくつかの側面を考察した後、人間の社会関係がその欲望と行動にどのように関係してくるのかについて考察する。

3.1. 欲望の構造

動物としての各個体から欲望を見るとき、その本質は感覚的満足を得るか、あるいは感覚的不快を除去するところにある。ところがこれらの最終目標は、一般にはその達成のために何らかの具体的事物の媒介を必要とする。したがって欲望は通常、何か現在個体が獲得していない対象の獲得に向かうことになる。言い換えれば欲望は対象を獲得することとして各個体に認識され、対象の獲得が個体の行動の主たる目的となる。

動物の行動は直接に対象の獲得に向かうこともあるが、一方で対象を獲得する行動が可能、またはより容易となるために、別の対象が道具として利用できる場合があつて、その道具となる対象を手に入れば最初の目的をより効率的に達成できる場合もある(目的とする対象を獲得する道具として通貨を手に入れるなど)。このような場合に、手段を提供する道具となる対象が当面の欲望の対象となることがあり、時には道具を手に入れることが、そのまま欲望の対象として固定されることすらある。単なる道具の獲得であってもその達成時点で「達成感」と呼ばれるある種の快感をもたらすこともまれではないことも、道具の欲望対象としての固定化を促している。

快感ないし不快には通常複数のものがあり、またそれらの獲得や除去の媒介となる対象もいくつか同時に存在する場合が多い。これに伴って欲望の対象も同時に複数存在しうる。さらに対象を獲得する可能性のある行動や、それぞれの行動を補助する手段も複数存在することがある。したがって欲望対象は、一般には同時に複数存在することとなる。

このことは行動選択にいくつか問題を生じる。複数の対象を、同時にすべて獲得しようとする行動はそもそも不可能かもしれない。あるいは、ある対象を獲得しようとする行動が結果として周囲の状況を変えてしまうために、他の対象の獲得を不可能にするか、そこまででなくてもより困難にするかもしれない。このような状況の下で、動物はそれぞれの時点で最適と判断される行動を選択しなければならない。

3.2. 行動の社会的制約

以上は動物が単独の個体として行動する場合に成立するが、動物の場合、行動にあたって、周囲に存在する同種個体との関係を見無視することはできない。人間は特に複雑な構造を持つ社会の中で生きる動物であり、社会から様々な行動の制約を受けることになる。とりわけ、人間社会に特有の分業関係は、他の動物には見られない複雑な行動制約をもたらすことになる。

人間と社会との関係を考えるとき、そこには様々な大きさの集団を認めることができる。その主要なものとして、家族、仲間、学校、分業集団を考えてみよう。なおこれらは一般にはより大きい国家や自治体の下に成立していると考えられる。

家族は基本的には血縁関係を基本とする集団であり、子供がそこで生まれ社会性を最初に意識するという点で重要な集団である。家族は本来は血統維持のための集団と考えられるが、実際には社会的要因が集団の性格に大きな影響を与えることになる。

少し大きなサイズの集団の中では、ほぼ例外なく、自然発生的に仲間という集団が生じてくる。集団としての仲間の規模は基本的に少数であつて仲間内では上位集団に属する他のメンバーと比較すると、より緊密な関係が維持されている。上位の集団が大家族であろうと分業集団であろうと、あるいは漠然と生活圏を共通に持つ集団であろうと、一定以上の規模を持つ集団の中には、ほとんど必ず仲間集団が発生する。

仲間の集団が大きくなると、時にはクラブや同好会などの形で、集団に共通の目標が設定されるようになることがあるが、この場合にはむしろ分業集団に移行したと考えるべきであろう。実際この様な性格を持つに至った仲間集団は、その規模を拡張する傾向を生じることが多い。仲間の規模が拡大して成立した集団の中では、通常は新しく部分集団として複数の仲間集団が作られることになる。

仲間集団がなぜ自然発生的に生じてくるのかは興味深い問題である。どのような集団であれそこに属する個体にとって、周囲の個体との相互関係が重要な問題となるのだが、大きな集団の中でそのすべてのメンバーと同様な程度で相互作用を持つわけではない。相互作用の頻度の低いメンバーとの関係を詳しく把握することは容易ではないと考えられる。このためまず仲間という比較的狭く、高い頻度で相互作用を持つ範囲で、相互の関係を確認し、それを仲間の外部にも敷衍することで、社会の中で自身が他の個体群と総

合的にどのような関係にあるのかを見定めているのではないかと考えられる。

学校は、その社会の教育制度に則って設置されている若年層への教育機関である。同じように学習や教育を目的とする集団でも、職業訓練やカルチャーセンターのような集団は、むしろ分業集団に近いと考えて良いであろう。

分業集団は主として生産に関わる、目的を共有する集団であるが、クラブや同好会のような生産に関わらない集団もここに含めて考える。

社会と個人の行動の関係について言えば、集団の中では個人に許される行動の範囲に制限が生じる。この制限には、集団のメンバー全体にわたって禁止されている、いわゆる「掟」とよばれるものと、集団のメンバー相互の関係に依存して、許されたり禁止されたりする行動制限とがあると考えられる。

「掟」はそれぞれの集団の中で禁止される行動として定義されているものである。個人が新しく集団に属することになる場合、明示的か暗黙かの相違はあるが、通常はその集団での「掟」があることが了解されている。

原則として個体は、その属する集団の「掟」を遵守することが期待されており、これに違反する行動は集団内の他のメンバーによって妨害されるか、あるいはあとで懲罰が下されると想定されている。

「掟」について特徴的なのは家庭と学校であろう。ここでは禁止される行為が言語的に提示されるが、中には社会的な掟というよりは、危険を回避するための禁止事項も多く含まれている。特に幼児は禁止されていても身近な行動については実行してしまう傾向があるが、結果は多くの場合不快な経験に終わるのである。このことはおそらく重要な意味を持っているのであり、個人が権威者からの禁止を「掟」として捉えて、それを受け入れることを習慣付ける効果を持つと考えられる。

集団内の個体の行動を制限するもう一つの要因に、個体相互の行動許容関係が存在する。個体の特定の行動について、本人と何らかの関係を持つ他の個体は、その行動を許容したり拒絶したりする。周囲の多くの個体から拒絶される行動は実質上実行できないから、個体にとって自身が周囲の個体とどのような関係にあり、結果としてどのような行動が許容されるかは重要な問題となる。他の個体の行動を許容するか拒絶するかは、集団内での相互の尊重される度合いや、相互の持つ好悪感情によって決まると考えられるが、仲間では好悪感情の影響が比較的強く出るのに比較して、分業集合では集団内で与えられた役割が大きく影響すると考えられるであろう。個体からみたときその属する社会集団の中で許される行動は、その個体が集団の中で他のメンバーとの間の、相互の尊重のされ方や集団内の役割、そして個体間相互の好悪関係を総合したものに依存することになる。ある個体に対する集団内の他のメンバーとの相互関係の総体をその個体の「社会的地位」と以後呼ぶこととする。

3.3. 個体の社会的地位

個体は言語の力も利用して、その欲望を達成する行動を計画しようとするが、この際に社会的に許される行動の範囲が、少なくとも十分正しく推定できなければ行動計画立案はそもそも無意味となるであろう。このことはひいては言語使用も無意味になる事も意味している。すなわち個体の置かれた社会的地位こそが、言語使用を可能にする決定的な要因であると言うことができる。

このように考えるとき、この社会的地位とは結局は個体が言語を使用する根拠を与えるものであり、自身が社会の中で何者であるかを同定する基礎となるものと言うこともできるであろう。するとこれこそが自我、あるいは言語使用の主体であると言うこともできる。

個体にとってその社会的地位がどのようなものであるかを知ることは重要な問題となる。それでは個体はいかにしてその社会的地位を知るのだろうか。社会的地位は結局は個体の行動に対する他のメンバーの評価の総体なのだから、個体がその社会的地位を知りうるのは、自身の行動に対して周囲の集団メンバーがどのような反応を示すかを観測する事を通じてであると言えよう。

集団に属する個体は、自身の行動に対して周囲のメンバー、ことに仲間と認められるメンバーが示す反応を、いわば自身の鏡像として利用することにより、自分に対する評価がどのようなものであるかを推定していると考えられる。

個体の社会的地位を決定するのは、集団内の他のメンバーがその個体に対して持つ評価の総合である。しかし他のメンバーがある個体をどのように判断しているのかは、本当の意味では、評価される個体の側からは直接に知ることはできない。

行動する個体にとって自身の社会的地位に関して直接観測可能なものは行動を目撃している他のメンバーの反応としての身振りや表情、あるいは述べられる意見などの行動などであり、個体のできることはこれらを基に、自分に対する相手の評価内容と、それらを総合した自らの社会的地位を推定することだけである。

このことを言い換えれば、行動する個体の想定する自分自身の社会的地位は、その個体の推定ないしは想像の産物に過ぎない。したがって厳密な意味では個体の想像した位置は存在しているとは言えないし、個体の信じる自分自身の自我も事実として存在しているとは言えないことになる。

3.4. 欲望対象としての社会的地位

社会的地位は行動の自由度を決定するものである。これは言い換えれば適切な位置を獲得することにより、それ以前には許されなかった行動が許されるようになるということを意味する。結果としてこれまで許されなかった、欲望対象を獲得する行動が可能となるであろう。このことは社会的地位は欲望対象獲得の手段となりうることを示しており、さらには社会的地位自体が欲望の対象となりうることを示している。実際のところ人間社会においては、社会的地位は最も主要な欲望の対象であるとも言える。

問題は、社会的地位は本人にとっては想像上の存在に過ぎないことから、たとえば具体的に存在する対象を獲得する場合と異なり、確かに獲得できたと言う確信を持ちにくいし、また実際に現在の位置が想定した効果を持っており、期待する行動を周囲が許容するかどうか、実際に行動を起こすまでは本当には確信できない点にある。

分業集団などでは職名などの記号を付与することにより、表向き特定の位置にあることを示す場合もあるが、これとてもその記号だけでは、記号を獲得した本人が期待する行動の許可が常に得られることを保証するものではない。このことから社会的位置に関する欲望にはいくつかの傾向が見られることになる。一つは社会的位置に対する欲望は、とりあえず達成されてもさらにより有利な位置を目指す形をとることである。より有利な位置を獲得する事により、行動への許可をより確実にしようとする意識が背景にあると考えられる。また、もう一つの傾向として、大した必然性もないのにその位置にしか許されないと想定される行動をとることにより、位置の効果をやたらと確認しようとする傾向も現れる。必要もないのにやたらと位置に許されると想定される特権的な行動を起こすことは、位置の保持という観点からも、より高位の位置の獲得という意味からも有害であるということを知っていても、あえて行動を起こしてそれが許容されていることを確認する欲求を感じる傾向がある。

これとはまた、すこしニュアンスは異なるが、仲間の間での雑談なども仲間として相手に受け入れられている事の確認や、仲間の中での相対的位置関係の確認という意味で、機会があれば実行される社会的位置を繰り返し確認しようとする行動であると言えるであろう。

社会的位置に関しては、その獲得方法についても明瞭性に欠ける部分が残る。分業集団内での有利な位置の獲得方法としては、一般に学歴や技能の習得、知識や技能を生かしての分業集団内での機能分担能力を持つことの証明、既に有利な位置にあるとみなされる人間の属性模倣、などがあると言われている。しかし、実際には集団の中で帰属している仲間集団の特性や、分業組織内に暗黙に存在する固有な評価基準などが関連してくる場合も多いので、一般的な方法を論じることは難しく、個別に組織の中で時間をかけて位置を向上させる手立てを習得する必要がある。

社会的位置については関係する行動の広範さや、位置を獲得したという信念の不確実さ、位置獲得方法の不確実さなどがあり、これらに関わる多くの要因が存在するため、位置獲得に関連する行動も多様なものとなる。この結果として個人が意識する欲望のほとんどが社会的位置に関するものとなる。

個人の属する集団は、実際にはただ一つではないから、集団ごとにその個人の位置が存在する。一つの集団内での位置向上をめざす行動が、他の集団において位置の低下をもたらす可能性もある。したがって、どの集団での位置をどの程度評価するかによって、位置獲得のために選択する行動も変化することとなる。社会的位置獲得に関しては、不確定な要素が多く行動選択に様々な問題を孕んでおり、逆にそれだけ位置獲得に関する問題が強く意識されることとなっているのであろう。

4. まとめ

本稿では、欲望達成のために行動する動物が学習能力を持つことを手がかりに、それ自体は抽象的な記述枠組みである言語が、具体的な世界の状況や行動と関連付けられる枠組みの可能性について考察した。

一方行動の背景にある要素として、分業という人間に特有の枠組みが、一方で言語の抽象レベルでの操作を促進して来た側面、社会の構造を複雑化し、人間行動に対する様々な制約を生み出してきた側面、結果として社会的位置を巡る複雑な欲望対象のあり方が生じてきた側面について考察した。

言語と分業、社会的位置への欲望と行動はそれぞれ影響し合いながらより精緻な人間社会と言語の構造を構成してきたといえる。